

「シャトブリヤンの眞相」

川 西 良 三

「悪の華」の詩人ボードレードに對する「講壇的」文學者ブリュンティエールの批評は、その精神の偏狭な一面を物語つてゐる。ブリュンティエールは、彼の傾向たる古典主義崇拜から議論を發して、見慣れぬ怪奇な「新しい美」に對する理解の乏しさをそこに示してゐた。近ごろ物故したアルベール・テイボデは、このやうな視野の狭いクリテイクを排し、新しい傾向や奇異な趣味に對しても、より廣くより深い同情を持つやうに努めた。このやうなテイボデの寛容な批評精神は、その死後相當な不評の波に見舞はれ、ともすれば忘却の淵に押しやられさうになつてゐたフランソワ・ルネ・ド・シャトブリヤン（一七六八——一八四八）François-René de Chateaubriand に對しても、よくあらはれてゐる。これを、ジュール・ルメートルの峻嚴な「シャトブリヤン論」と比較すれば、兩者の批評態度に大きな相違のあることが判る。ルメートルは「シャトブリヤンがこのやうに書いた裏には、このやうな虚榮的動機があり、このやうに傲慢な心理があつた。」と詮索するに急であつて、その一卷は惡罵と内情曝露とに終止してゐる。その結果、シャトブリヤンが世紀的に偉大であつた所以を見失ひがちになつてゐる。

辰野隆先生も指摘されてゐるやうに、特に偉大なる作家は、その死後數十年の間かへつて不人氣に陥り、生前の盛名に引きかへてさまざまに惡評される傾向がある。ヴォルテールもヴィクトル・ユージュもこのやうに、その死後、反動的な不評の波に襲はれた。近くには、アンドレ・ジイドもその一例であつて、今日のフランス文壇では各方面から批判の矢を浴びてゐる。この現象に就いては二通りの理由が考へられる。一は、世評を形づくるものが論理的人間

たるよりも心理的人間であつて、盛大な名聲に對して羨望嫉妬の念が誘發され易いことである。その結果、巨人の死後には、その聲價を不當に引き下げようとする運動が生ずるやうになる。次にまた、進歩生成してやまぬ思潮の波は舊い思想を乗り越えようと努めるのが常であり、その動きが前代の盛名に對する批判となつて現はれるものとも見られよう。とにかく、このやうな事情からシャトブリヤンも、往々にして「讀むを要しない」部類の中に片付けられがちとなつてゐた。従つて、文學史上でラシーヌやモンテスキユやルソーなどと同一程のページを割かれる重要な文豪でありながら、我が國では、よりマイナーな作家たるモーパッサン程にもその名前を知られてゐないといふ奇現象を生じてゐる。しかし、その死後百年を経過した今日、この人物の眞の位地は、テイボデが堅持したやうな公正な批評的精神を以て再認されることが必要であらう。

テイボデはシャトブリヤンを評して、まづ、*Grand vivant* と名づけてゐる。「偉大なる生活者」とは何を意味するか。すなはち、生活の現實的な面をできるだけ擴大し、量的にも内容的にも人生を、より豊富に、より多様に體驗しようとする傾向のことを指してゐる。生活意欲の旺盛な人といふことになる。しかし、文學者の生に對する態度は、必ずしもこのグラン・ヴィヴァンのものであるとは限らない。むしろ、文學者の多くは、内向的な性分、陰うつな人生觀、直接的感覺だけで楽しむことのできない性格、速やかな實行を妨げる觀念過剰と不精さ、等々により特徴づけられてゐる。これを文學以外の標準から言へば、文學的性質とは女性的性格の謂はれであり、進取的な果敢な男性的性格にまで達しないものだとも見られてゐる。概して言へば、彼らは實人生に於ける勝利者でなく、また、勝利者たり得べき實行性や根氣強さや手際よき等を有しない。むしろ、觀念の世界に逃避し、其處で消極獨善的な勝利の曲を奏で、わづかに自ら慰めてゐる者が多い。實人生に於ては希つても到底得られない實現を、夢想の世界で成立させることを求め、周囲の現實的な人々の眼から見れば全く理解できぬ獨りよがりな孤獨の生活に沈潜してゐる。この型の方が文學者の一般概念になつてゐる。

なほ、この一般概念も分類すれば、種々に岐れる。まづ、生活的に貧弱であつて、人生的経験は全く乏しいが、豊かな空想の王國に住んでゐる者がある。この人々にとつては、人生の目的は、實人生よりもその觀念世界の審美的構成に存する。この典型としては、文學的世界を唯一の實在としたヴィリエ・ド・リラダンを最とし、ボードレール、マラルメなどの審美的藝術家が擧げられる。

他方にはまた、實生活の量的貧弱さを一種の諦念をもつて承認しつゝも、その數少い人生的事件の一二を驚くべき深刻さで觀察し思索し、乏しい經驗内容からすれば比較を失するやうな大文學大思想を形成してゐる者がある。ジャン・ジャック・ルソー、セナンクール、ヴェルレーヌ等がその典型である。アンドレ・ジードもこの範疇に入るものと思へる。ジードの生涯も人の興味を強く索くやうな事件には全く乏しい。彼自身は、生活の直接的必要に迫られることがなく、書齋で安樂に座して創作し思索してゐたといふのが真相であると言へよう。よつて、傳記作者が、ジードの實人生から何か興味ある事件を引出さうと試みるならば、甚しい困惑に直面するであらうと思へる。フランソワ・モリヤックの小説も、多くの劇的な契機に富んでゐるが、よく眺めると、そのモチーフには千遍一律な點が見受けられる。これは、モリヤックがその乏しい人生經驗の中から特に數個の事實を取上げ、それを繰返し考究してゐるに過ぎないことを證明してゐる。この種の文學者の中で、最も誇張された例として、マルセル・ブルーストの名を擧げることが出来る。彼は持病の喘息が年とともに昂じてくるのに苦しみ、三十五歳以後は世間との交はりを全く斷ち、家居專一になり一室に閉ぢこもつて暮らした。以後二十年の間、この病人は、若かりし頃の思ひ出ばかりを精神財産とし、これを反芻し味はひ記録してゐたのである。「スワン家の側にて」や「花咲ける乙女の蔭に」などの長々しい物語りの内容を、外面的事件の數に整備してゐる忍耐強い人があるとすれば、あれだけの長い文章が如何に少い事件の上に組立てられてゐるかを知つて一驚を喫するであらう。

ところが、シャトブリヤンは、先述せるグラン・ヴィヴァンの系列に屬する。これは文學者の人數全體から見れば

異例の少数であると言へる。ルメートルは、シャトブリヤンが人生に要求し且つまた自負するところは過大であり、中庸を失し、虚榮的であるとして、終始一貫して論難してゐる。これはルメートル自身が、既述したやうな審美的な空想構成型、もしくはまた、人生に對する深刻思索型の方を好む趣味に固定し、いはゆるグラン・ヴィヴァンの多くのプレタンション（要求、自負）に對して甚しい個人的反感を持つたからであらう。然しながら、これを以て、「偉大な生活者」がフランス文學に存在しなかつたと言ふことはできない。まづ、フランスに於けるこの系列の第一人者として、十八世紀に於けるヴォルテールの廣範にして華麗な生活領域を我々は知つてゐる。次いで十九世紀には、初めにシャトブリヤンが、さらに後にはヴィクトル・ユーゴーが、このフランス文學界の一つの世襲財産を繼いだと言はれてゐる。文學界の一つの世俗的要求として、誰か一人の文學者を「王座」に登らせ時代の旗じるしにする必要があり、又そのやうな念願は實際に何時の時代にも存在してゐたからであつた。

このやうな、別名をグラン・ヴィヴァンといふ「時代の寵兒」には、採らざるを得ないそれ／＼のポーズ（姿勢）のあつたことは容易に理解できよう。彼らは多勢の注目と期待との中に脚光を浴びてゐたからである。そのポーズとは、ヴォルテールに於ては「市民的自由の擁護者」であり、シャトブリヤンに於ては「人生に對する深い倦怠(ennui アニイ)を感じるに到つた人間の、慰められることのない悲哀」であり、ヴィクトル・ユーゴーに於ては「共和政治及び廣大な人道主義の理想に生きる戦士」であつた。しかし、シャトブリヤンのこのポーズもまた、一つの虚榮の美服であるとして、ルメートルの嫌惡し攻撃するところであつたことは言ふを要しない。

「人生倦怠の悲哀」が彼のポーズもしくはテーマであつたところから、彼の作品中に占める「ルネ」の重要な意義を我々は理解するのである。小説「ルネ」はフランス・ローマン主義の一の記念碑であつた。十九世紀の流行たる「人生倦怠」は實にシャトブリヤンの創始にかゝつてゐる。

シャトブリヤンが常に「ポーズ」を取つて讀者を眩惑してゐるとの批難と平行して、も一つ有力な批判が彼に加へ

られてゐる。それは彼が「傲慢」であるとの批評である。「傲慢」といつても、それがシャトブリヤンにあらはれた形態では、他者を蔑視するといふことではない。自己を過大に評價し、自分を宇宙の中心であるかのやうに考へ、自身の心の動きにのみ興味を持ち、これを表現し發表するに急であつたことを意味する。これは、ローマン主義が自己中心の世界観をとり、自分一個の思想や情感をそのまゝにぶちまけて、それで優れた文學になると考へた傾向の先驅をなすものである。自己一人の心の中に去來した感情や思想が、その儘で天下萬人の興味をひくと考へることに原因する。このことが一層極端になれば、彼のごとき悩みや苦しみや悦びをする者は天下に絶無であり、その悲痛は史上に比較するものがなく、その哀愁は凡俗の企て及ぶべからず、彼の絶對専有であると思ふに至る。

以上二つの批難に對しては、シャトブリヤンの側に立つての辯護もできると思ふ。第一に、誠實な告白に缺け、常にポーズを取りつくろつてゐるとの批難に就いては、これは、前記せるごとく、シャトブリヤン一人の責任ではないと言へる。一代の盛名には、その人の自律的行爲以外に、時代が彼に要求し、殆ど強制する一つの位地がある。この點、シャトブリヤンのまき起こした偉大なる聲望が、彼に加へた社會的ゆがみを理解してその作品を讀むべきであらう。

次に、「傲慢」の誇りに關しては、これもまた、單にシャトブリヤン一人に加へらるべきものではなからう。問題は、ローマン派文藝を是認するか否認するかに歸着する。「君よ、世の中に我のに似たる悲しみをする人ありや」(上田敏譯詩の一句)とは、ローマン主義文學全體に通ずる宣言であると言へよう。

そも、シャトブリヤンのやうな把握しがたい複雑な性格を論ずる場合、明快簡單な斷定には常に警戒が必要である。フランスの著名な批評家の間でも、シャトブリヤンが生活者として豊かであつたかどうかに就いての見解ですら、すでに大きく二つに分れてゐる。筆者は、あれを讀み、これを讀み、去就に迷ふ場合もあつた。

テイポデはこれをグラン・ヴィヴァンと斷定し、サント・ブーヴもまた、ほゞ同じやうに考へてゐる。しかし、ル

メートルは、シャトブリヤンの實生活はその書かれたものより遙かに貧弱であり、彼の社會的成功も稱されてゐるやうな輝やかしいものではなかつたときめつけてゐる。ルメートルの見解の方に近くて、テイボデとは對照をしてゐる者に、ギユスターヴ・ランソンがある。

ランソンの見解は次のやうに要約できる。シャトブリヤンは、その生來の傲慢に災ひされ、人生に希ひ求めるものを眞實に獲得するための卑屈な手段を蔑視した。従つて、この人は、着實な現實的成功を得ることができず、常に「たゞ、自分が望みさへすれば得てゐるのだが。」との傲慢な視角から、侮蔑をこめて實人生を見下してゐた。そこで、シャトブリヤンは、實社會で獲られなかつたものを、空想によつて追窮した。空想は安易なる獲得の手段であつた。このやうにして、この人物の性格中の二大要素たる傲慢と夢想とは無限に發達した。しかし、その結果は、現實的成功によつて報ひられることがなく、きびしい空虚の感であり、限らない倦怠の連續であつた。自我を崇拜することとに疲れ果て、倦怠と憂悶とのみが累積し、彼はその空漠たる心を老年にまで引きづつて行つた。これが眞相であるとランソンは主張する。

テイボデとランソンが畫いた此の二つの像の中、いづれが正しいのであらうか。筆者は、これに對する結論を引出すため、若干の努力を重ねた。そして、この二つの見方は、二つの異つた視角よりすれば、雙方とも眞實であることを悟つた。

まづ、彼の作品に重點をおいて眺める時、確かに、空想的に構成した部分の多いことが目立つてゐる。それを眞實に體驗したことがなく、たゞ斯くありたいと考へるだけの世界を畫いてゐる場合が多い。有名な「アトラ」「ルネ」「殉教者」等に描寫された男女の灼熱的な戀愛は、それを實際に經驗し、もしくは觀察しての結果ではないやうである。斯くありたいと思ふ空想力の命ずるところによつて書かれたもののやうに思へる。

あのやうな純愛の成立は、殊に、當代のフランソワ・モリヤックによれば、甚しい虚構であるといふことになつて

ある。或る日、モリヤックは「トリストアンとイソルテ姫」の傳說的純愛を畫く樂劇の上演せられる劇場に居合はせた。彼は、場内の老若男女の悉くが感動の餘り落涙し、目にハンケチを押し當ててゐるのを見て、全く奇異に思つたと告白してゐる。「この人々は、その誰もが本當に經驗もして居ない世界を舞臺に眺め、しかも、それで涙を流してゐる。」と。モリヤックによれば、現實の人間世界で二人の男女により成立する戀愛の真相は、美なる面もあれば醜なる面もあり、虚偽驅引きや無理な努力等がからみ合ふものであり、二つの心も平行し難く、交互に反逆するのが普通であると。このやうな戀愛のレヤリスムによると、アトラ・シャクタス的な、もしくはエドール・シモドセ二殉教者」に於ける二人の主人公的な完璧な戀愛の結合は否定される。

さらにまた、シャトブリヤンの「アトラ」に示されたアメリカの山林原野、「イティネレル」にあらはれるギリシヤ、パレスチナ、エジプト等の風景描寫に就いても、多くの疑問が持たれてゐる。すなはち、これらの風景は、眞實に彼の眼により眺められ觀察されたといふよりも、借り物である場合の方が多い。例へば、北米奥地の原始的風景にしても、彼はその全部を實際に見てはゐないことが指摘されてゐる。シャトブリヤンは確かにナイヤガラの瀧あたりにはまだは旅行してゐる。しかし、それから先、彼の主張するやうに、ケンタッキーの奥地を探り、ミシシッピ河の流れに沿ふて下り、フロリダ地方も見たといふやうなことは、如何にしても實證することができない。その旅行が時日的に短かつたこと、アメリカ奥地では當時（一七九一年）インディアンの猛烈な叛亂があつて白人の旅行が危険な状態にあつたこと。この二つの事實は、シャトブリヤンの主張を首肯させるものでない。よつて、彼はマルモンテルの「インカ族」その他の文獻、多くの旅行記などを参照し、巧みにアメリカ奥地の風景を作りあげたらしいと推測されてゐる。細かな觀察を自ら行ふことは不得意であつたとしても、シャトブリヤンは大まかに全體的アトモスフェールを把握することに長じてゐた。こゝにもまた、彼が空想によつて現實を補足し、空想によつて現實を美化した、その特有の創作態度があらはれてゐる。このやうであるから、それ程美しくなく、それ程豊かでもない實生活から、全

くとび離れた架空の世界を彼が創作したとも考へられないではない。

しかしながら、文學史的に彼の生活の足跡をたどつてみれば、實生活そのものが貧弱であつたとは決して言へない。數奇な波瀾に富んだその前半生、新大陸アメリカへの旅行、反革命戦争への参加、イギリスでの亡命生活、「アタラ」の成功以來數十年つゞいた文學的王座、駐獨公使、駐英大使、短い期間ながら外務大臣の要職にあつたこと、フォンタース・ジュベール等の數多い友人との永い交際、ポーモン夫人・レカミエ夫人等との交情、その生涯を通じて斷えることのなかつた艷福の數々、等と興守來ると、シャトブリヤンの生活は外面的にも華やかな光彩に包まれてゐる。テイボデの言ふ格蘭・ヴィヴァンの資格に缺けることはない。これをしも貧しい收獲であると彼自身が見るのであれば、この人物の自負心がまことに過大であつて、求め得る以上を希ひ過ぎたといふことになる。

斯くして、シャトブリヤンに就いては、その作品では空想的に構成した部分の多いが目立つが、實生活そのものは多彩にして豊富であつたとの結論に達するのである。

さてまた、此の語の眞意に思ひを凝らすならば、テイボデのいふ格蘭・ヴィヴァンの意味は單に文學史的なものであるかも知れない。すなはち、十八世紀から十九世紀へのフランス精神界の轉移が、ローマン派の先驅たる此の人物の生涯の變化を通じて成就された、その事實を指すのであらうか。この意味でのテイボデの一文を引けば「十九世紀初頭の精神生活の波、フランス詩歌の韻律的變化、フランス生活と文藝との一般的テーマ、これらすべてはシャトブリヤンを通してあらはれ、シャトブリヤンによつてのみ説明され得る。」と。

このやうに、精神界の動きをその一身に代表したといふ象徴的意味に於いての「偉大なる生活者」の名稱であれば何人もこれに異存はないであらう。

以上の諸説の他に、ベディエ、アザールの説もまた傾聴に價すると思ふ。これによると、シャトブリヤンの生涯が榮光と名譽と愛情とに包まれ、幸運と機會とに充ちてゐた豊富さを認める點ではテイボデと同じである。しかし、こ

れだけの光輝に満ちた生活を送つても、なほシャトブリヤンが失望を感じ、失望につゞく倦怠に悩まされ、人生をひどく味気ないものに観じなければならなかつたのは一體何故であるかを説明しようと試みてゐる。ペディエ、アザールはそれを、ルメートルやランソンのやうに、「シャトブリヤンの傲慢」の精にはしてゐない。すなはち、シャトブリヤンは、人並はづれて豊富な想像力を有してゐたと考へる。よつて、如何に輝やかしい現實が與へられても、より一段と美しい想像に走つてゐる彼の精神は、これを以て満足することがなかつた。そして終には、すべての興へられる現實に興味を感じなくなつたものであると。

右の如く諸説を通觀し來つて、シャトブリヤンの全體的真相は、かなり明らかになつたやうに思ふ。そこで、次に彼の作品に就いて何が言ひ得られるかを考究してみたい。

さて然し、「もう此の人物に就いてはすべてが言ひ盡くされた」といふ部類に入る此の前期ローマン派の巨人に就いて、筆者は今さら何を附加しようとするのであるか。彼の諸作品はその一つ一つが有名であつて、今日フランス文學を語る程の者には各書物の内容すらが常識となつてゐる。しかしながら、それら作品の次々にあらはれ來つた文學史的因果、もしくは系列的意義といふものはそれほど理解に容易ではない。

アナートル・フランスのやうなディレッタントの場合には、作品は全くの氣まぐれであつたり、精神の飛躍や空想の奔放な散歩であつたりした。しかし、シャトブリヤンの如きグラン・ヴィヴァンの場合、諸作品は必ず生活的な裏づけを持つてゐる。この生活的な裏づけをたどり、文學史的連鎖を眺めるのは興味深い仕事である。勿論、このやうな小論でそのやうな企圖を全面的に達することはできないが、シャトブリヤンの諸作品の系列的意義をできるだけ探り當て、各作品をその連鎖の上にもう一度位置づけることを、私の一つの文學史的習作としてみたい。

シャトブリヤンは一七九七年、英京にて刊行された

「フランス大革命に關聯して、古代及び近世の諸革命に就いての歴史的、政治的、道德的考察」
によつて文壇にデビューした。

これより以前、彼は一七九一年に大西洋の波濤を越えて新大陸を訪れたが、佛王ルイ十六世が革命の暴徒に捕はれたのを見て急ぎ故國に歸り、直ちに聯合軍に参加してゐる。しかし、間もなく、シオンヴェルの戰鬪で傷つき、その上に熱病を發し、ジェルセーで暫く療養した後、英國に渡つた（一七九三年）。英京に於けるシャトブリヤンは、劍を捨て、文筆によつて立つ決心をしてゐた。當時の彼は胸を病み、貧困に徹し、苦惱陰うつの時機であつた。彼はこの時代の最大注目點たる母國フランスの大革命に對する見解を明らかにしようとした。母國フランスのみならず、全ヨーロッパの社會を根本的に揺り動かしたこの大事件に對して、生來行動的な彼が無關心で居れるわけは無かつた。しかもまた、ロンドンに滞留してゐる間も、フランス國內のギョチン斷頭臺のひびきが「湖上の波音のやうに」日々に不斷に聞えてくるといふ切迫した政治情勢にあつたからだ。

さて、彼の革命に對する態度は如何であつたか。彼自身はまづ、大貴族の出身ではない。ブルターニュ地方の郷土的存在であつたその父の末つ子として生れてゐる。したがつて、革命によつてそれほど大きな被害を蒙る立場にはなかつた。されば、大革命の初期の進行に際しては、時代の風潮に同化し易い青年の常として、革命の精神に全く共鳴同感し、革命の理想を謳歌する氣持に傾いてゐた。彼自身は、その初年の文學的教養として、十八世紀の啓蒙思潮、特に「自然兒」ルソーの影響を強く受けてゐる。よつて、十八世紀の新思想が現實の政治面に推進されてゆくのを見て、その心内に何らの反對も感じなかつた。

然るに、一七八九年の初めよりシャトブリヤンはバリに在つて大革命の進行ぶりをつぶさに目のあたり眺めてゐたが、大革命がその成果を維持するために血なまぐさい暴壓的性情を發揮するに及んで、むしろ嫌氣の氣持に傾いてきた。「もしも、革命が、凄慘な罪惡により幕をひらいたのでなければ、私は全くそれに傾倒したであらう。ビックの

尖端に突き刺された生ま首をみた時から、私は後すさりせざるを得なかつた。」と。反革命分子への見せしめとして、フロンやベルティエ等の不幸な犠牲者の血したる生ま首が槍の先に突きさされ、パリ市中を持ち廻されてゐる光景を見て、彼の心はつひに全く革命から離れてしまつたのである。

まだその内心の思ひを隠すことを知らぬ年若いシャトブリヤンのことである。その儘フランスに留まつてゐるならば、必ず悲劇的な場面に遭遇するであらうと知人のマルシェルはつとに豫感してゐた。そこで、マルシェルはこの青年に大いに外遊を勧めた。シャトブリヤンのアメリカ行は、マルシェルに刺戟され、新大陸で一の地理的発見をするために行つたのだと稱されてゐるけれども、右のやうな所に眞の説明が存在してゐたのであつた。

「諸革命についての考察」なる書物にあらはれたところでは、革命に關する彼の見解は次の如くになつてゐる。まづ人類とは、本來が進歩發達をとげるものでなく、次々の時代に、また昔と同じやうな過誤混亂無秩序に陥る運命のものである。従つて、そのもたらした大變動により一大驚異と見なされるフランス大革命もまた、昔から人類の経験し來つた同型同質の革命を今一度反覆したものに過ぎないと。シャトブリヤンはこの理論の具體的證明として、古代ギリシャの諸革命を仔細に想起し、これがフランス大革命と相通する諸點のあることを明らかにしようとした。

論旨も幼稚な節があり、その所説も隨所に自家撞着を生じてはゐる。しかしながら、この處女作もまた、「如何に幼稚な出来ばへであつても、處女作はそれを精しく研究すれば、その人の後年の思想や傾向のすべてを胚芽として含んでゐる。」との一般法則に反するものでないと言はれてゐる。この定言は、彼の場合、その處女作にあらはれた文學的傾向に於てのみ言ひ得るのである。法制的人間的規制にわづらはされない自然の世界を禮讚したり、憂愁悲哀や孤獨を唄つたりしてゐる點、ルネの萌芽は明らかであると言つてよい。しかし、思想的方面に於ては上記の定言は適用され得ない。後年のシャトブリヤンが擔つた政治的役割は、自由民主の革命精神に對する反動的保守的色彩を濃厚にし、王政の護持とカトリック舊教の復興とにその理想を固定してゐるが、このエッセイに於てはその萌芽がまだ見

えてゐない。革命が流血の連続に陥ることは反對してゐるけれども、王政をとるべしとの政治的主張は未だ表明して居ない。また宗教に關しては概して無關心を表明し、或る場合には無神論をさへ唱へてゐる。

處女作がこのやうに思想的に後年の諸作と分離してゐることに就いては、テイボデが次のやうに説明してゐる。「異教文明崇拜の不信心なシャトブリヤンは、亡命生活により根を失はされた結果である。彼のキリスト教への復歸は、その母國への歸還（一八〇〇年）、彼の昔からの精神秩序、彼の幼少よりの敬虔な生活への歸還と時期を同じくする。」と。さて、此の母國性郷土性への復歸は相繼ぐ著作により如何に表現されたかを見よう。

一八〇二年には彼の大作「キリスト教の眞髓」（ジェニー・ドヌ・クリスチャニスム）が發表され、そのカトリック教信奉が宣明されるのであるが、これに先立つて、その大著の中に組入れられる筈のエピソードたる「アタラ」だけが先づ公表された（一八〇一年）、何故この一篇だけを抜きだして早く發表したかと言へば、それには次のやうな事情が説かれてゐる。もとゞゞ、「アタラ」は、彼の構想した敘事詩「ナツチェ族」の一部として、英京で起稿されたものであつた。（従つて、製作年代も「ジェニー」よりやゝ古い。）しかし、この敘事物語り「ナツチェ族」の稿は未刊のまま英國に置き去り、彼はアタラ・ルネの二挿話だけを持參して歸國し、これを「ジェニー」に組入れるつもりでゐた。然るに、アタラの校正刷りが何らかの事由で紛失するといふ事件が生じた。紛失の事情は判然としない點があつたので、作品が割せつされることを危惧し、この物語りだけを取急ぎ出版することになつた。

上記の理由をそのまま信じてよいかどうか疑問がある。アメリカの野生兒シャクタスと純情なクリスチャンの娘アタラとの戀物語り、そしてその悲劇的終末の描寫が、嵐のやうな一世の感激をまきおこし、シャトブリヤン（當時三十三歳）を一躍文壇の最有名人たらしめた出世作であつたことは何人も知るところである。「キリスト教の眞髓」の方は、全體として見ても、論議の餘地ある問題を多く含んで居り、また各部分を拾つてみても、ロジックの不確かな點が目立つてゐる。よつて、その成功を事前に見込むことは困難であつた。それよりも、まづ「アタラ」の方を謂は

「豫告篇」の形で先に出したならば、折しも十八世紀純理想の乾燥ぶりに飽き、むしろ大きな情熱感激を希求してゐた當時の人々に大いに歓迎されるであらうとは、著者自身も豫見したであらう。偉大なローマン的情熱がまさに全歐に擴がらうとする前夜、大革命の狂暴化を以てその極端にまで達し終つた十八世紀的な合理主義が今まさに廢棄されようとする間に、この激情と不安の書が一大センセーションを生じたことは考へ易いことである。この書物の成功は、幸福な偶然によるよりも、著者の周到な豫見に基いてゐたものと思はれる。そしてまた、この「アトラ」を以て、次の「ジェニー」への世の關心を高めようとした著者の作意も、極めて巧妙であつたことを思ふのである。

「アトラ」は「ジェニー」と同じやうなキリスト教的意圖により書かれたと稱されてゐる。しかし、このアメリカ原野の戀物語りを、その儘でキリスト教の一の美學的證明にしようとするのは無理な點があつたやうだ。「ジェニー」に數年先立つて起稿されただけに、こゝにはかへつて十八世紀的なものが濃厚に臭つてゐる。篇中の人物であるシャクタスや老宣教師は、決して簡素な道德の實行者ではない。二人とも複雑な人生觀を有して居り、或る場合には近代的な惱みをさへ述べてゐる。そしてまた、文明社會を罪惡的なりと見て、大自然の原野に憧憬するのも、キリスト教的な心情によつたものではない。これは明らかにルソーの影響と見なされる。但し、作品の感覺に於ては十八世紀の冷たい擬古典主義のものと全く異つてゐたので、當時の専門批評家達が擧つて批難を加へたにかゝはらず、一般讀者は熱烈な拍手をもつてこの新感覺の書物を迎へたのであつた。

「アトラ」より一年遅れて公刊されたけれども、シャトブリヤンの主著であり、眞に中核的な作品と見なされるものはやはり「キリスト教の眞髓(もしくは精神と譯す)」である。しかし、本稿もすでに豫定の紙幅に達したので、これについては次號に論ずることにしたい。